

〔父・梨元勝と過ごした最期するとき〕

お別れ会に1千人。 父も「恐縮です！」と喜んで いるはず

文●鈴木智子

孤独な生い立ちと家族への愛

父は、私が物心ついたときには「芸能リポーター」として、いろいろな人を追いかけていました。テレビをつければ画面にいるけれど、家にはいない人。同じ家に住んでいても、顔を合わせてきちんと会話をしたこととって、考えたら本当に少なかったですね。

でも、父は家族のことが大好き。テレビの印象と同じように、家でも底抜けに明るい人。人に嫌われるハードな仕事なのに、愚痴も悩みも家族には言いませんでした。そのため、仕事の大変さがわからない私は、寂しさから小学生ですでに反抗期。ぶつかってばかりだったのが今では悔やまれます。

父は戦時中の防空壕で生まれ、生後間もないころに実の父親が戦死しています。父親の写真もなく、記憶もない。未亡人になった母親の再婚に反対したため、祖父に預けられて

芸能リポーターの梨元勝さんが2010年8月に亡くなった。がんと告げられて、わずか2カ月半。取材に飛び回った65年の人生だったが、闘病の日々は期せずして家族団欒の時間になったという。勝さん最愛の一人娘・麻里奈さんが父の思い出と素顔を語った。

写真は2008年のアメリカ旅行でのもの。



父の遺著『絶筆 梨元です、恐縮です。ぼくの突撃レポーター人生録』（展望社刊）を手にして。





▲母方の祖父母とともに撮影した家族写真。実の親と縁の薄かった勝さんは妻の両親も含め、家族を大切にしたい話ですが、私が小学生のときに「娘のために仕事をやめようかと思っ

育ち、母親と祖母が相次いで亡くな
ってからは、身内は祖父だけという
境遇。そんな孤独な父でしたから、
自分の家庭を持つて一家団欒にあこ
がれもしたでしょう。けれど、忙し
く飛びまわる仕事のためにそれは無
理。理想と現実の狭間で葛藤もあつ
たようです。父が亡くなってから聞

いた話ですが、私が小学生のときに
「娘のために仕事をやめようかと思
っている」と、目を真っ赤にして知
人に相談したこともあったとか。
母親の愛にも飢えていたようです。
私の母と結婚してから、父がソファ
で寝ていると、ふとんをかけてくれ
る。そんなことがうれしくてしかた



▲温泉旅行にて。闘病中、勝さんは家族と出かけた旅行の思い出を楽しそうに語ることもあったという。

◀多忙を極めるなか、少しの時間ができると、家族で外出することもたびたび。麻里奈さん4歳のころ。

がなかったといえます。

365日24時間、芸能リポーター

そんな父の家族サービスは、年に一度、夏に2週間の休みを取って、家族水いらずで海外へ行くことでした。どんなに忙しくても、そこだけは家族と過ごす決めて、1年前から飛行機などを予約しておくのです。最後になってしまった2009年の家族旅行は、母の行きたかったポルトガルをはじめに、イタリア、そして私が高校時代に留学したイギリスを回り、フランスへも足を延ばしました。

楽しい旅でしたが、父は旅行中でも仕事で使っている4つの携帯電話をいつも手放さないので。リアルタイムで情報を追って、いち早く伝えるのが芸能リポーター。つねに仕事で頭から離れないのでしょうか。母や私が観光をしている間も、父はホテルで原稿書き（笑）。この仕事は本当に好きでたまらなかったのだと思います。

突然のがん宣告、容態は末期

2010年4月ごろから咳が止まらなくなり、6月に肺がんが判明し



なしもとまりな タレント

1980年1月31日、埼玉県生まれ。98年にシルバーチャンネル「スター千夜一夜」でデビュー。以後、テレビドラマ、バラエティー、情報番組などで活躍。勝さんの闘病中は、父に代わり、地方局の仕事を引き受けた。

た父。すでに末期の状態で、手術はせずに抗がん剤治療を受けることになりました。父はがんとわかってからも前向きで、闘う覚悟を決めていたようです。

母は父の身の回りの世話をし、私は医師の話聞き、それをわかりやすく父に説明する役。がんのことをいろいろ調べてセカンドオピニオンの先生を探したり、ほかの治療法はないかと勉強したりしました。

毎日が病との闘いでしたが、楽しいこともありました。病院の夕食のときに、父が3人で食べようとピザの出前を取り、病室でピザパーティーをすることも。また、いままでは肩をもんであげることもなかったのに、よく背中をさすってあげたりもしました。背中をさすと少し痛み



思い出の
テレカ

麻里奈さんが6歳のころ、旅行先のハワイにて撮ったツーショット。勝さんは、この写真をとても気に入り、テレフォンカードにして、つねに財布の中に入れて持ち歩いていた。



生前の父と一緒に番組に出演したことも。

がラクになるようでした。すると、「麻里奈にやってもらえて、しあわせだ、しあわせだ」と、2回くり返して言

うのです。「ありがとね、ありがとね」もそう。自分ではもう何もできないから、せめて口ではしっかり伝えたいから、握手をするんです。父はニコニコとして強く握り返してくれました。

部屋にプレーボーイと名高い芸能人の写真を貼って、「こういう人にはだまされちゃダメだよ」と、早期教育していたそうです(笑)。私のアルバムに「結婚するときには早く言ってください」と書いたこともあります。いつか自分のもともと離れてしまおうのがさみしかったんですよ。父と娘、似た者同士でしたから、もつと仲よくなる時間が欲しかったな……。

牌はいま父の書斎にあります。でも、まだもう会えないんだという実感がありません。どこにいても家によく電話してきたのに、それが無いのが不思議なくらい。

私はこれからいろいろな仕事をやってみたいと思っています。

父の闘病中、代打でテレビやラジオに出演したとき、父が喜んでくれた姿が忘れられません。その仕事は今も引き続き、出演をさせていただいています。

素顔は子煩悩な恥ずかしがり屋

自分なりのやり方で頑張りたい

病室にも仕事を持ち込み、死ぬ直前まで取材を続けていた父ですが、家族を大切にしていたのだなど、改めて思い起こすことがいくつもあります。

最後は静かに、穏やかな顔で息を引き取った父。お棺にはスケジュール帳や原稿用紙を入れて、家族と身内だけで密葬で見送ったのち、ひと月後にお別れ会を行いました。萩原健一さんや浅香光代さんら、1千人の方が集まってくださった。なかには、かつて父とバトルをしていた方の姿もありました。それを見て、父のやってきたことは間違っていない

父は私が跡を継ぐことを望んでいましたが、今の時代にあつた自分のやり方に合うような形で、できることから一つ一つ取り組んでいきたいと思っています。

また、インタビューなどのお仕事をさせていただく際は、父のように相手の方から「この人になら話してもいい」と思ってもらえるように、父のすてきなDNAを受け継いだと信じて、がんばります！

たとえば私が小学生のとき、父母参観に行く約束してくれたことがありました。そこに森進一さんと森昌子さんの結婚発表がぶつかってしまった。父は必死だったのですね。森進一さんの事務所に父母参観のことを話し、なんと翌日に発表を延ばしてもらったなんてこともあったそうです。

父は恥ずかしがり屋で、直接娘に大好きとは言わない人でしたが、母によると、私が赤ちゃんのときから

かっただのだと思います。「芸能リポーター」というジャンルを切り開き、みんなが知りたいニュースをきちんと伝えるために全力で走りまわった人なのだと。

父が亡くなって2カ月。遺影と位

梨元勝さん (なしもとまさる)
1944年12月1日、東京・中野生まれ。法政大学社会学部を卒業後、講談社に入社し、女性週刊誌『ヤングレディ』の取材記者となる。1975年以降は芸能リポーターとして、テレビ朝日系『アフタヌーンショー』や『じゃまかいた』『スーパードラマ』など、テレビ番組を中心に活躍。2010年8月21日、肺がんのため逝去。享年65歳。